

## 花川病院 井口 大暢（医師／回復期リハビリテーション4病棟担当）

**功 績** Oさん 80代男性 肺気腫 心不全 右視床出血(平成31年3月下旬発症)  
回復期リハ病棟に再入院したOさんは改善の見込みはなく、ご家族は自宅での看取りを希望した。  
主治医である井口医師を中心にチームで自宅看取りに向け体制を早急に整え、入院1週間で自宅退院となった。そして退院後1週間で永眠されたが、ご家族から、Oさんは安心してやすらかに逝かれたこと、家族も大満足だったと感謝の言葉を頂いた。  
自宅での看取りに向け短期間で思いを達成させる体制に取り組んだ井口主治医の功績。

**推 薦 者** 丹羽すみ子（看護部長／看護部）

**推 薦 理 由** 病院嫌いなOさんを大好きな自宅で看取るという患者さん、ご家族の思いを達成するために、患者さんの状況から時間がないと判断、1週間で井口医師がチームをまとめ体制を整え、在宅チームにお願いしました。そしてその後1週間という短い在宅生活、看取りになりましたが、患者さん、ご家族は安心して濃厚な時間を過ごすことができました。  
チームリーダーとしての井口医師の働きを理事長賞に推薦いたします。

### 内 容

平成31年3月下旬 右視床出血発症、保存的治療後、令和元年5月上旬、リハ目的で当院回復期リハ4病棟へ入院した。左片麻痺、左半側空間無視、失認の症状が強いことに加え、認知機能低下とサルコペニアよりリハの積極的介入は難しくADLは全介助、6月頃より嘔吐や食事量が徐々に低下、拒薬となり、家族は積極的治療ではなく原因を知り苦痛の緩和をしないと希望され、7月上旬、H急性期病院へ転院となった。本人は延命は希望せずとのことであった。

H病院検査結果、逆流性食道炎、HP感染、大腸ポリープの診断となり7月中旬再入院となった。さらにADLの著しい低下ではほぼ臥床状態でベッドギャッジアップ時の血圧低下、嚥下機能の低下など見られた。家族は精査の結果に納得され、できれば自宅で看取りをしたいとのことであった。

本人の状況から、あまり時間はないと井口医師は判断、早期退院に向け取り組んだ。

医師、MSW、看護師、介護士、管理栄養士、セラピストは在宅支援に向け、サービス調整、訪問診察、訪問看護の導入、ご家族への介護指導、痰吸引指導、食事は完全側臥位による摂取、移乗指導など急遽取り組んだ。娘さんは介護休暇をとった。

7月下旬、入院から7日目に自宅退院となった。

翌日、主治医指示で病棟看護師退院後訪問を実施した。Oさんはリクライニング車椅子乗車で待っていた。職員の声掛けに笑顔で手を上げる動作あり。

Oさんは好きな物を摂取していて嘔吐もなく、水分も摂取できていた。奥様、娘さんも終始笑顔で自宅退院に満足な様子が伺えた。退院日は居間の電動ベッド横に奥様は布団を敷き、娘さんはソファに寝たとのことであった。

その後、自宅退院から7日目に自宅で看取りとなった。

訪問看護師を通して、ご本人は大好きなウニも食べ安らかな日々を過ごし、ご本人、ご家族は大満足であったと感謝のことばを頂いた。